

イタリア学会
第65回大会 プログラム

2017年10月21日(土)

上智大学
(四谷キャンパス)

会場 上智大学 四谷キャンパス
2号館 414 教室

◆ 研究発表 I 10:00 ~ 11:30

10:00-10:30

1. アルド・ロッシと 1968 年——1970 年前後のロッシの言説と戦後イタリアの建築教育問題の関係について——
松井健太（東京大学） 司会：池上公平（共立女子大学）

10:30-11:00

2. 考古学者ジャコモ・ボーニと大正期の日伊交流
福山佑子（日本学術振興会特別研究員）
司会：ジュリオ・ベルテッリ（大阪大学）

11:00-11:30

3. 変容する身体の表象——視覚文化のなかのピノッキオ——
石田聖子（日本学術振興会特別研究員）
司会：太田岳人（千葉大学）

◆ 休憩 11:30 ~ 13:30

◆ 総会 13:45 ~ 15:00

◆ 開催校挨拶 15:00 ~ 15:15

◆ 研究発表Ⅱ 15:15～16:15

15:15-15:45

4. 歴史と虚構の境界——クラウディオ・マグリスの小説——

山崎 彩（東京大学）

司会：菊池正和（大阪大学）

15:45-16:15

5. 『エルサレム解放』における直接話法の導入表現の配置——前行末尾までに導入表現が示され次行冒頭から発話が始まるタイプについて——

村瀬有司（京都大学）

司会：村松真理子（東京大学）

◆ 特別講演 16:30～17:00

16:30-17:00

Un confronto tra l'insegnamento delle lingue straniere in Italia e Giappone. Il caso dell'italiano e del giapponese

Paolo CALVETTI（イタリア文化会館館長）

◆ 懇親会 18:00～20:00

会場：主婦会館プラザエフ（8階スイセン）

アルド・ロッシと 1968 年

——1970 年前後のロッシの言説と戦後イタリアの 建築教育問題の関係について——

松井健太（東京大学）

建築家アルド・ロッシ（1931-1997）は、企画を担当した 1973 年の第 15 回ミラノ・トリエンナーレの建築国際部門の展示を通じて、「テンデンツァ Tendenza」と呼ばれるグループのリーダーとしてイタリア国内外でその名が広く知られるようになった。「テンデンツァ」は当時ロッシやその周辺で多用された語であり、これまではロッシの建築作品に代表されるような一種のデザイン運動を指すものとして理解されてきた。他方で実際にはトリエンナーレの展示やテンデンツァの語を理解するための文脈は、1960 年代から世界中に広がっていた学生や労働者による異議申し立て運動に求められるという点は見逃されてきたように思われる。例えば「テンデンツァ」グループの一員としてトリエンナーレの展示に参加し、そのカタログにも寄稿しているマッシモ・スコラーリ（1943-）はミラノ工科大学の学生運動グループの中核メンバーだった人物であり、またこの展示には同時代のイタリア国内外の建築家たちの作品に加えて、ロッシが指導していたミラノ工科大学の学生たちの活動報告も含まれていた。こうした事実は、トリエンナーレの展示やテンデンツァ・グループが建築教育という領野と深い関わりを持つことを示唆している。

ミラノ工科大学建築学科では 1963 年以降、学科の組織体制に対する学生の異議申し立て運動が定期的に行われ、1967 年には同学科で“*sperimentazione*”と呼ばれる学科再編成の試みが着手されるに至った。これにはロッシも教育者の立場から深く関わっている。この試みの大きな特徴の一つは、それまでの講座型教育に対して、“調査グループ *gruppo di ricerca*”といういわばゼミ型教育を導入した点にある。この“調査グループ”は、現実から遊離した従来のアカデミズムではなく、“調査”という現実の状況の把握・分析に基づく教育を志向するものであり、またアトリエ師弟モデルを踏襲した戦前からの教授／助手／学生の権威主義的ヒエラルキーの枠内ではなく、三者から成る“グループ”の共同作業として建築教育を位置付けようとするものであった。

こうした調査グループは複数組織され、ロッシは自身が受け持ったグループのために「都市分析と建築設計」というテーマを設定した。ここでは1966年の著作『都市の建築』に集約される1960年代前半のロッシの都市問題・都市分析研究が引き継がれると同時に、それまではほとんど語られてこなかった「建築設計」の理論の確立という課題が主題として論じられるようになる。同時期の講義資料に示されているように、都市分析に基づく建築設計の理論という以上の枠組みの中で、リアリズム、合理主義、イデオロギー、歴史といった個別トピックが掘り下げられていった。

他方でロッシが大学環境の外で発表していた文献資料は、同時期に建築の論理性や建築家の職能といったトピックもロッシの思考の重要な位置を占めていたことを示唆している。学生による異議申し立て運動は、建築学科という制度のみならず、社会における建築家という職能の位置づけに対しても問い直しを迫るものであった。こうした問題に取り組む上でロッシにとって重要な参照項となったのが、18世紀前半から19世紀にかけての啓蒙主義の時代の建築文化である。とりわけ同時代のカスト（地図台帳）制度の確立や各種職能学校の設立、またフランス啓蒙主義建築家の理論（とりわけエティエンヌ・ルイ＝ブレイ）がロッシの関心を引き付けた。

本発表では、1970年前後のロッシの各種雑誌・書籍で発表した論文に加えて、これまでほとんど考察の対象とされてこなかったミラノ工科大学におけるロッシの講義資料も検討することで、1968年に代表される社会情勢・気運や建築学科・教育という制度とのかかわりの中で同時期のロッシの言説やテンデンツァ・グループの意義を理解することを試みたい。

考古学者ジャコモ・ボーニと大正期の日伊交流

福山佑子（日本学術振興会特別研究員）

（共同研究者：ミリアム・ピルッティ・ナーメル）

20世紀前半にフォロ・ロマーノとパラティーノ丘を発掘した考古学者として知られるジャコモ・ボーニ（1859-1925年）は、日本に強い関心を持っていたことでも知られている。1871年にローマが首都となって以降、イタリア王国は首都の都市改造を進める一方で、イタリアのルーツとしての古代ローマを可視化する意図も持ちながら考古学遺跡の発掘を積極的に行っていた。コロッセオやフォロ・ロマーノにおいても初めて大規模な発掘が行われ、その結果これらの場所は考古学の史跡という現在の姿になっている。このような時代の流れの中で、ボーニは重要な遺跡の発掘を指揮し、ラピス・ニゲルなど多くの遺物を発見するとともに、発掘に層位学の手法や写真技術を用いることでイタリア考古学の評価を国外で高めた人物でもあった。晩年にはファシスト党と接近し、彼が没後にパラティーノ丘に埋葬されたのもダンヌンツィオとムッソリーニの提案によるものである。

このように20世紀初頭に活躍した著名な考古学者であったボーニだが、彼の日本趣味は単に日本の事物を愛好するといったものに留まるものではなかった。彼はヴェネツィア王立美術学院在学時に留学生の長沼守敬と共に学び、以降も長沼の仲介で辰野金吾と交友を持ち、ローマの家には田中松太郎を下宿させてもいた。ボーニと日本の関係については、彼の助手が執筆した伝記を用いた研究が2008年にイタリアで刊行されている。しかしこの研究はイタリア側の二次文献のみに依拠していることもあり、ボーニが上述の3名の日本人と親交があったという事例の提示に留まっている。そこで本研究では、Istituto Lombardo 所蔵のボーニ関連文書とこれまで調査が行われていない日本側の資料を精査し、ボーニと日本の新たな繋がりを明らかにすることを通じて、当時の日伊交流の一側面を示したい。

ボーニ関連文書に残された住所録や書簡、当時ボーニに面会した可能性がある日本人に関連する記録には、ボーニが継続的に日本人と交流していた様子が残されている。まず、伝記や先行研究では「哲学者」とされ不明な点が多い田中松太

郎は、写真や印刷技術の修得を目的として欧州に渡航し、後に日本の美術印刷の父とも評された人物であった。巖谷小波が主宰する文学サークルの一員でもあった田中はイタリアにおいて日本文学の紹介も行っており、ボーニは彼の活動の後押しもしている。田中は帰国後、岡倉天心が主導した1915年の法隆寺金堂壁画保存調査に写真家として参加しており、発掘調査において写真を重視したボーニの影響もうかがえる。また、禁酒運動で知られる青木庄蔵のような渡航者も旅行記の中でボーニに面会したことを詳述しており、時にはボーニの仲介でイタリアの高官と知遇を得ている。更に西洋古代史の村川堅固、考古学の濱田耕作など、彼の専門に関連する日本人との繋がりも存在する。日本政府の主導でイギリスやドイツを中心に西洋史学や考古学の知識が日本へもたらされる中で、ボーニの存在は日本とイタリア考古学との繋がりを作るものにもなっていたのである。

このように、本研究で明らかにするボーニの交友関係からは、多くの日本人が彼を通じてイタリアや考古学への関心を深めていたことが示される。これまでボーニの日本への関心はあくまで彼の個人的な趣味とされてきたが、その背景には留学生として派遣された長沼との交流や当時のイタリアにおける日本への関心の高まりがあり、彼を通じて更なる日伊交流の促進もなされていた。考古学者ボーニを通じた日伊交流という本研究で扱った事例は、明治期の国家主導の研究者招聘や留学生派遣によって育まれた交流が、大正期には更に強固な繋がりになっていたことを示す一例とも位置付けられよう。

変容する身体表象——視覚文化のなかのピノッキオ——

石田聖子（日本学術振興会特別研究員）

1909年、「未来派創立宣言」でフィリッポ・トンマーズ・マリネッティが「われわれはケンタウルスの誕生を目の当たりにしようとしているのだ！」と高唱するに先立って、イタリアである特徴を備えた身体表象が出現しはじめた。異素材から成る身体である。十九世紀より視覚文化が台頭するなかで、身体が、現実と非現実が織り成す重層的な総体として知覚されはじめたというわけだ。そうした歴史的文脈のなかにピノッキオは誕生した。本発表では、カルロ・コッローディの小説『ピノッキオの冒険——ある操り人形の物語』(*Le avventure di Pinocchio. Storia di un burattino*, 1883)の主人公ピノッキオを視覚文化特有の表象としてとらえ、同作の史上初の映画化作品『ピノッキオ』(*Pinocchio*, 1911)における例との比較を通じて、その意義を探ることを目的とする。

ピノッキオの身体は木でできている。生気に欠け、硬く、運動に適さない素材である。にも拘わらず、ピノッキオは——木としての性質を保持しつつも——豊かな感受性と知性を備え、きわめて高い運動能力に恵まれた存在として描かれる。いやむしろ、ジェットにより「踊ったり、フェンシングしたり、宙返りしたりする不思議な操り人形」として彫り出されたピノッキオには、当初からしなやかに動くことが期待されていた。そしてついには人間への変身すら成し遂げる。ピノッキオは、現実と非現実の混在を体現する存在であるばかりか、その特性ゆえに人間を大きく凌駕する存在として描かれるのである。

重層的でちぐはぐながら超人的でもあるピノッキオの身体は、視覚文化における新たな身体性の萌芽を予告するように思われる。実に、ピノッキオの身体は既存の領域や境界を軽々と乗り越えて増殖する。十九世紀末のフィレンツェで子供向けに連載された新聞小説という限定的な出自をもつピノッキオの物語がわずか130年あまりのうちに世界的なベストセラーとなったのは周知の通りだ。言語や文化だけではない。メディアの境界も越えてゆく。ピノッキオは原作小説の枠を大きく飛び出し、文学、漫画、絵画、演劇、映画、テレビなど様々なメディアで繰り返し表象されてきた。ピノッキオの物語に派生する創作物の数は膨大で、〈ピノッキオアート〉と呼ばれるひとつのジャンルを形成するほどである。

ピノッキオの身体の意義は、視覚文化が生んだ典型的なメディアである映画における身体のありかたと比較することでより鮮明に浮かび上がるだろう。映画の身体もまた異素材である光の粒子から成り、スクリーン上に身体的実体をもたない以上、あらゆる変身の可能性に開かれている。そうした映画的身体の可能性に逸早く着目したのが、1909-1915年頃、イタリアで盛んに製作された一連の初期喜劇映画だった。ピノッキオの物語の初の映画化はその潮流において試みられる。ジュリオ・アンタモーロが監督を務めた映画『ピノッキオ』は、サーカス仕込みの運動能力を誇るフェルディナン・ギョーム（トントリーニ）を主演に迎え、トリック撮影技法を駆使することでピノッキオの両義的な身体に挑んだ。また、原作にないエピソードを付加してオリジナリティを出すことで、以降の〈ピノッキアーテ〉を先取りした。

ジョルジョ・マンガネッリは『ピノッキオの冒険』を「潜在的に無限の本」と呼んだ。この本が引き起こす増殖の現象の中心にはピノッキオの身体がある。ピノッキオは現実と非現実にまたがって存在する自らの身体を利用し、異世界を渡り歩く。翻って、ピノッキオの身体を介して異世界の交流が可能になるといってもいい。このとき、ピノッキオの身体はそれ自体が一種の媒体（メディア）と化す。ここで身体は、表象されるのみならず表象するものともなり、新たな身体を創造する“場”そのものとなるのである。

歴史と虚構の境界——クラウディオ・マグリスの小説——

山崎 彩 (東京大学)

現代イタリアを代表する知識人・作家のひとりであるクラウディオ・マグリス (1939-) は、トリエステ出身のドイツ文学者・エッセイスト・小説家である。彼は、大学でドイツ文学を講じるのと並行して新聞などにも精力的に記事を寄せ、さらに、1986年の『ドナウ』によって注目を浴びて以降、最新作『公訴棄却』(2015)まで、寡作ながらもたゆみなく小説を書き続けている。本発表では、マグリスがこれまでに発表した小説6作品を取り上げ、概要を明らかにすると共に、それらの小説の構成、語りのパターンについて検討する。

マグリスははじめ『オーストリア文学とハプスブルク神話』(1963)、『どこから遠くへ：ヨーゼフ・ロートと東方ユダヤ人の伝統』(1971)といった研究書によってドイツ文学者として名を馳せた。彼が初めて書いた小説は、『一本のサーベルに関する推論』(1985)という小品で、第2次世界大戦末期にフリウリのカルニア地方に突如現われたコサック軍と彼らのたどった末路を、さまざまな「証言」をつなぎ合わせて再構成しようとするミステリー仕立ての物語である。続いて1986年に発表される『ドナウ』は、現在でもマグリスの代表的著作のひとつと見なされているが、「語り手」の「私」が、ドナウ川に沿って旅し、見聞きしたものを書くという形でドナウ川沿いの「辺境」地域——しばしば多文化共生圏である——に住む人々の「記憶」と「声」を集めた、ルポルタージュとフィクションの間をいくような作品である。その後、ゴリツィア出身の哲学者カルロ・ミケルシュテッター (1887-1910) の親友エンリーコ・ムロイレ (1886-1959) を主人公とした伝記小説『もうひとつの海』(1991)、各章が独立した「小宇宙」として想定され、章ごとにマグリスに縁の深い土地の地誌、歴史、伝説などが綴られる『ミクロコスモス』(1997)、人格の分裂した主人公の一人語りから第2次世界大戦後にイタリアからユーゴスラヴィアへ移住した人々の運命があぶり出される『目隠しのまま』(2005)といった作品が続く。最新作の『公訴棄却』は、トリエステに存在したナチスの強制収容所「リジエーラ・ディ・サン・サッバ」にまつわる謎をめぐる小説だが、各章がそれぞれ想像上の博物館の展示室として想定され、読者は、一章ごとにあらたな展示室に入り、そこに並ぶ展示品と、展示品に付き

れた解説を読むという趣向になっている。

このように、マグリスの書く小説はひとつひとつ非常に凝った、そして個性的な構造を持ち、それが作品の魅力のひとつとなっている。しかし、6作品を比較すると、それらはみなあるひとつの方法によって執筆されていることに気づかされる。それは、さまざまな「証言」を集めて一堂に並べ、ひとつの大きなモザイク画を作り上げるという方法である。これは、初期の文学研究書において取られた方法、すなわち、多数の論拠を集め、そのひとつひとつに解釈を加えながらひとつのコンセプトへと収斂させていくというやり方を、おそらく小説執筆にも応用したと考えられるが、本発表では、このような「定型」の意味するところは何かということまで明らかにしたい。マグリスの発表してきたエッセイを手掛かりに、「小説」というジャンルによってマグリスが表現しようとしていることについて考察し、結びとする。

『エルサレム解放』における直接話法の導入表現の配置 ——前行末尾までに導入表現が示され次行冒頭から 発話が始まるタイプについて——

村瀬有司 (京都大学)

トルクァート・タッツの『エルサレム解放』(以下 *GL* と略記) の直接話法を導入表現の位置にしたがって分類してみると、興味深い特徴が浮かび上がる。

直接話法を導く言葉 (*dire, rispondere, gridare* など) は、通常発話の前に置かれる。このタイプは、①導入表現が行頭に置かれて、発話そのものは行の半ばから始まるタイプと、②導入表現が前行末尾までに提示されて、発話が次行の冒頭から始まるタイプに二分される。また③導入表現が発話のなかに挿入されるタイプもしばしば見うけられる。少数ではあるが④導入表現が発話の後ろに置かれたり明示的な導入表現が示されない場合もある。出現頻度が高い①～③を例示してみよう(下線部が導入表現)。

- ① E poi che giunse a la regal presenza
del principe Goffredo e de' baroni,
chiese: «O signore, a i messaggier licenza
dassi tra voi di liberi sermoni?» (*GL*, VI, 17, 1-4)
- ② Al fin del re britanno il chiaro figlio
ruppe il silenzio, e disse alzando il ciglio:
«Partimmo noi che fuor de l'urna a sorte
tratti non fummo... (*GL*, X, 59, 7-60,2)
- ③ «Credasi» dice «ad ambo; e quella e questi
vinca, e la palma sia qual si conviene.» (*GL*, II, 32, 3-4)

GL の直接話法全体における各タイプの導入表現の比率を確認してみると、① 38.8%、② 27.9%、③ 28.7%、④ 5.6% である。一方、*GL* と同じ 8 行詩節で書かれたボイアルドの『恋するオルランド』(*IO*) では、① 64.6%、② 16.0%、③ 17.3%、④ 3.2%、またアリオストの『狂えるオルランド』(*OF*) では① 48.0%、

② 12.2%、③ 33.8%、④ 6.3% である（なお各作品の百分率の合計が 100 を超えるのは、①と②の直接話法のなかに、③の挿入型の導入表現を重複して伴うケースが若干存在するためである）。

	①タイプ	②タイプ	③タイプ	④タイプ
<i>GL</i> (%)	38.8	27.9	28.7	5.6
<i>IO</i>	64.6	16.0	17.3	3.2
<i>OF</i>	48.0	12.2	33.8	6.3

3 作品ともに①のタイプが多数を占めているが、タッソの作品では、①の占める比率がボイアルドとアリオストの騎士物語に比べて低く、②③の使用頻度、特に②の比率が相対的に高い。本発表では *GL* において存在感を示すこの②の導入表現を検証する。

このタイプの導入表現に導かれた *GL* の直接話法をみると、1 連（8 行）を超える長さの発話の比率が高くなっている（②のタイプの直接話法全体の約 5 割）。またこれらの直接話法は、連の 1 行目から始まる場合が多い（同約 4 割）。長めの発話を連の冒頭から展開するのが、この配置の導入表現の一つの特徴となる。

また上記の引用からもうかがえるように、前行末尾までに導入表現が示される場合、その述部はしばしば副詞、前置詞句、ジェルンディオなどを伴う。導入の動詞を補足するこの種の表現は、スペースに余裕のある②のタイプに顕著な特徴となっている。

主要登場人物の直接話法を整理してみると、②のタイプの導入表現は、十字軍の指揮官ゴッフレードや、隠者ピエートロらの発話によく使われていることが分かる。このような登場人物の発話の傾向にも留意しながら、タッソの導入表現の配置の意図を考察する。

大会会場

上智大学 四谷キャンパス 2号館 414 教室
〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1

控室

2号館 415 教室

アクセス



昼食

大会当日、キャンパス内の学食（2号館 5階等）は開いています。昼食は学食の他、四ツ谷駅付近の飲食店をご利用いただくか、お弁当をご持参ください。

懇親会のご案内

日時：大会当日 18時00分から20時00分まで
会場：主婦会館プラザエフ（8階スイセン）
会費：¥6,000-（学生¥4,000）

同封の振込用紙で9月22日までにお払込ください。

お払込後のキャンセルはご遠慮願います。

*お支払いいただいた懇親会費に余剰金が出た場合は、これを学会への寄付として扱わせていただいたうえで会計報告に明記いたします。

イタリア学会

Associazione di Studi Italiani in Giappone

〒 615-8558 京都市右京区西院笠目町 6
京都外国語大学外国語学部イタリア語学科
Tel: 075-322-6101 Fax: 075-322-6245

E-mail: studiitalici@gmail.com

URL: <http://studiit.jp/>